
人狼奇譚

デベ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人狼奇譚

【Nコード】

N1198I

【作者名】

デベ

【あらすじ】

人がモンスターになつてしまふという奇病の存在する世界で生きる満月みつぎという少年と時雨しぐれという少女の物語。

序章：悲劇の始まり

序章

草木も寝静まる丑三つ時、森に囲まれた小さな集落に絶叫が響き渡った。

音源を辿ると集落の中にある民家であった。その民家では家主と思われる一人の男が質素な布団の上に横たわり悲鳴をあげていた。よくよく見てみると男の体は右腕の肩から下が人のそれではなく、硬い鱗に覆われた異型の物に変わり果てていた。さらにその腕の異型部分は徐々に浸食しているように見える。

集まっている者の中で一番老け込んでいる男が、静かだがはつきりと聞こえる声で呟いた。

「・・・どうやら間に合わなかったようじゃな。」

その一言で集まってきていた村人たちは顔を歪めた。

「村長お願いです！もう少し待つてはもらえないでしょうか！！」

一人の女が泣きながら先ほどの老けた男にすがりついた。

「今日中には着くはずなんです！だから・・・」

村長はすがりついて来た女性の肩に手を置き

「時雨しぐれや、お前さんもわかつているはずじゃ・・・。このままではここにいる村人全員が危険にさらされる。浸食もすでに胸にまで達してしもつた。これ以上は待てんのじゃ・・・。」

それを聞いて時雨と呼ばれた女は首を振り、顔を手で覆い家から飛び出して行った。

村長は後ろ姿を悲痛な顔で見送り、その背中が見えなくなったところで近くの男に声をかけた。

「覚悟はよいな？」

村長に話かけられた男は泣きながらも前に進み出て、手元の斧を強

く握りしめた。そして横たわっている男に近づきその斧を振りかぶった。

「ごめんね。兄さん……。」

斧を持った男は振りかぶった斧を、横たわっている兄と呼んだ男に、勢いよく、振り下ろした

他の者が目を反らす中、斧を振り下ろした男は泣きながらも口には笑みが浮かんでいた……。

序章：悲劇の始まり（後書き）

途中まで書いてあるので修正が終わり次第続き上げていきます。
面白そうだな。と書いてくださった方はぜひ続きも読んでみてください。

文の書き方とか問題だらけですがどうぞよろしくお願いします。
とりあえず、あらすじを書くのが苦手です・・・。

1章：出会い

1章

木々が生い茂り満足に日の光も満足に届かない森の中を一人の男が歩いていた。

大きめの袋を背負い一般的な麻で作られた服を着て、寒さをしのぐ為に動物の毛皮を用いた防寒具を羽織っている。

18歳前後だろうか、背丈は普通よりも少し高い程度、線の細い体格だが筋肉質であるためか痩せている様には見えない。髪は黒く、鋭いナイフを思わせる切れ長の目、癖のある髪のように髪の中の一部が逆立っている。

男は足取り軽く静かな森の中を進んでいく、腰まで届くだろう葉に水滴を付けた植物が生えているが、男は意に介した様子はない。

男は道がわかっているのか足取りに迷いはないように見える。

どうやら日没も近いので急いでいるらしい、そうしてある程度進んだところで立ち止まると目の前の樹木を見た。

「・・・どうやら道に迷ったようだ。」

目の前の樹木にはナイフで付けたような引つ掻き傷がついていた。

よく見ると男の進んで来た側の樹木にも似たような引つ掻き傷が一定の間隔でつけられていた。

男はこのまま進むか悩んだのち、傷を付けた樹木の根元に荷物を置いた。

「日も暮れかけているし、今日はここらで野宿だな。」

草木をナイフで切り倒しある程度のスペースを作った。

その作業が終わるころには日も完全に傾き周囲は完全な闇に溶け込んでしまっていた。

作業を終えた男は慣れた手つきで火を起こし、竹を利用した水筒の

水を飲み干し、保存食の干し肉を食べ始めた。

しかし、どういうことなのか先ほど男が飲み終えたはずの水筒には、なぜかまた水が並々と入っていた。

食事を終え、男は愛用しているナイフを研ぎ終えたところで寝ることにした。

火を消し、明日には村を見つけると決意し瞼を閉じた。

ぴちゃん　ぴちゃん

額に落ちてくる水滴により男は目を覚ました。そしてすぐに周囲の様子を窺い、ナイフを手に警戒態勢に入った。

何かが男の眠っている場所に近づいてくるような音がしたからだ。

「・・・・・・・・」

殺気はない。

どうやら男に危害を加えるために近づいてきている訳ではないらしい。

今は隠れているが、見つかった時にどうなるかわからないため、男は警戒を続けたまま木の蔭から物音のする方を確認した。

周囲も暗くまだ少し遠くにいるようではつきりとした姿は見えない。徐々に近づいて来るにつれてその姿が見えるようになってきた。

遠目で見た限りでは、人間の様に見える。

昼でも薄暗いこの森の中で大した装備もなく動いているようだ。

質素な衣服が前に寄った村の普段着と変わらない。どうやら村人らしい。

「ふう・・・・・・・・」

ここでようやく息を吐き、緊張を解いて出て行くことにした。しかし何か起こった時にすぐ出せるようナイフへの意識は外さない。

ナイフを使うまでもなく終わるだろうが、念には念をといてころだ。

ガサツ

「ひっ！！」

声の質から考えるとどうやら女のような声だ。

女は一瞬だけ立ち止まるとすぐに今来た方角に向って走り出そうとした。

「驚かしてすまない。君は柏村の場所を知っているだろうか？」

その仕草を見て相手が逃げ出す前に男は早口で質問をした。

女はその問いかけに答えずに来た道を逃げ戻ってしまっていた。

呼び止めた時に伸ばした右手が哀愁を誘う。

「・・・唐突に出て行っただのは不味かったか。」

男はそう呟くと荷物の場所まで戻り毛皮を被った。そして「どうせ俺は怖い顔さ・・・」と呟いてそのまま動かなくなった。不貞寝である。

周囲の水滴の落ちる音が男のことを笑っているようであった。

女は走っていた。

村で夫が奇病に侵され村の掟に従い清められることになった。

清めとは名ばかりの斬首刑である。

女はその清めの光景を見届けることができずに逃げ出したのだった。

そして行くあてもなく飛び出し、近くの森に駆け込んだ。

息切れし、どれだけ苦しくても走るのをやめたくはなかった。

このまま自分も死んでしまえばいいとさえ思っていた。

「はあ・・・はあ・・・どうしてっ・・・！」

先ほどから出てくるのはその言葉だけである。

夫と自分に降りかかった理不尽。

夫の最後を看取ることができずに逃げ出した自分への自問。

唯一あの奇病を治すことができるという、都お抱えの特別な隊、そ

れに1週間も前に使いを送り今日の昼までに到着する予定だったというのに、突如として進行しだした夫の病魔への怨嗟。

それらが押し寄せ、「どうして」と繰り返すことしか女にはできなかった。

そうして数分ほど走っていると、突然目の前に知らない男が姿を見せた。

驚き、小さい悲鳴をあげ立ち止まり、男の顔を見たところで急いで来た道を逆走し始めていた。

男は一般的な麻を使った衣服を身にまとっていた。

ここまでならただの行商で済むのだが、男を見てすぐに逃げ出してしまうた。

ともすれば狼のような鋭い目をしていたのだ。

男のその狼のような鋭い目だけが暗闇の中でギラギラと輝いているように見えたのだ。

男が何かを言っていたようだが、恐怖によりそれどころではなかったために聞き逃した。そして一息ついたところで気がついてしまった。

直前まで死にたいとすら思っていたはずであったのに、つい先ほどあの男に殺されるのではと思った瞬間に逃げ出してしまっていた。

「死にたかったはずなのに、夫と同じところに行こうとしていたはずなのに・・・。」

そうして女は絶望の中、顔を手で覆い泣き崩れた。

昼であつても薄暗い森の中、藪の中にぽっかりと空いている小さな空間に一人の男が座っていた。

寝起きなのかどこか意識がはつきりしていないような顔で保存食と竹筒に入っている水で軽めの朝食を摂っていた。

早朝の森の中は寒いのか毛皮にすっぽり包まっている。

朝食を終えたあと、水筒内の残りの水を頭から被り眠気を完全に飛

ばし頭を拭いた。そして空になった水筒を虚空に差し出し、指で一度だけ縁を弾いた。
するとどういふことか次の瞬間には水筒に並々と水が満たされていた。

男はそれを見て微笑み、すぐ真顔に戻ると移動の準備を始めた。
今日中に柏村に辿り着いておきたかったのだ。

道に迷って途方に暮れかけていたのだが、昨日の段階では気がつか
なかったが、屈んでよくよく見てみると藪の間に獣道らしきものが
薄っすら見える。

自然を乱すことなく整然と先へ続いていた。

後ろを振り返る。

男の進んできた道は、無残にも植物が踏み荒らされ、本来ならば存
在しなかった場所にデカデカと道を作り出していた。

・・・見なかったことにした。

獣道には昨晚話しかけたが、そのまま逃げていった女の足跡も続い
ているようだった。

「これを辿れば近くの村に辿りつけるかもしれない。」

そうしたら柏村への情報を入手しようと決めた。

期待に胸を膨らませ、移動の準備も終え勢い勇んで足を踏み出した。
・・・理由をあげるとしたら、この森は日当たりが悪く、地面が水
を吸い難くい性質で、苔がびっしりと地面を埋め尽くしており、か
つ目的地が近いのではと勢い込んで踏み出した足が、一番すべりや
すそうな地面を捉えてしまったことだろう。
つまり何を言いたいかというところ

男は盛大に転んだ

男が転んだ拍子に近くの草木から水滴がバラバラと落ちた。

水音があたかも笑ったかのように鳴った、男は羞恥で赤くなりながら咳ばらいを一つし、今度は足場をしっかりと踏み、地面の状態を確かめがなら獣道を進み始めた。

それは見ていた。

本当に偶然見つけた同類だった。

この世界に生まれてから初めて出会った同類だった。姿形はまるで違うのに、普通に見ただけではそこかしこで徘徊している人間達とまったく変わらない。それでもなぜか自分と同じ異端だと感じ取れた。そして興味を持った。

だから少し行動を観察してみようと思ったのだ。

つい先ほど、彼は人間と同じように転倒した。

その姿がとても滑稽だった。

人間と同じ姿ではあるが、人間などとは比べられない力を持っているというのに、だというのに人間と同じ様に転倒したときは思わず吹き出してしまいそうになった。

人間であった時のことなど全て忘れようとしていたというのに、昔と同じようにそんな感情を抱ける日がまた来るとは思ってもいなかった。

しばらく観察を続けてもいいかもしれない。あの耳まで真赤になっている彼を……。

もう取り戻せないと思っていた己の感情を呼び戻せるような気がするから……。

1章：出会い（後書き）

この作品は書きためてあったものを細々と修正して投稿しています。
その為、続編が数時間後には投稿されます。

続編を見てやってもいいぜ！

という方はぜひ続きを読んでやってください。

それでは続編の修正をして参ります。

1章：出会い（2）（前書き）

俺の連続投稿はまだ終了してないぜ！（某アニメの主人公風に）

1章：出会い（2）

目が覚めた。

どうやら泣き疲れて寝てしまっていたらしい。

木々の間から見える空はすでに明るくなっていた。

今頃は夫と呼んでいた人は地面の中に埋められてしまっているのだろう。

私が弱いばかりに最後の最後に夫の顔を見ることすら叶わなかった。

夫の死を思い出し、また涙が流れて出してきた。

「うう……。」

昨晚の出来事を思い出した。

自分は夫の後を追って死ぬことすら出来ないような小心者だった。

夫のところへ行けるなら死んでしまってもいいとさえ思っていたというのに、夜に森の中で知らない人を見たというだけで逃げ出してしまった。

「……村へ帰ろう。」

突然飛び出して村の人達も心配しているだろう。

辺りを見回しどうやらここは村から少し西へ行った程度の辺りだとわかった。

外から来た人にはとても分かり難いのかも知れないが、子供の頃から出入りしている森だ。

獣道や植物による目印、わからない訳がない。そして足取りに不安はあるものの自分を待っているであろう人達のいる村に向かって歩き出した。

そうしてしばらく歩くと唐突に森が途切れ開けた場所に出た。

薄暗い森にいたために、強い日差しに目を細めた。

日差しに目が慣れるまでしばらくその場から動けずにいた。

目が慣れてくると少し離れた場所に民家が見える。

どうやら無事に戻ってくることができたようだ。

女は覚悟を決めて村へと足を向けた。

村が近づいて来るにつれ、自分の心音がドクドクいつているのがわかるようになってきた。

ある程度まで近づき、また女が泣き出しそうになり始めたところで、村の異変に気がついた。

村の外周、遠くから見える範囲にはなんの異変もなかったのだが、村に近づき村の中央部分が見えるようになってくる。

それは予想すらしていなかった状態で女を迎え入れた。

村の中央部とも言える場所がクレーター状に消し飛んでいたのである。

何が起きたのかわからず女は少しの間だが放心してしまった。

我に返ると誰かいないかと村人の影を探し始めた。

「誰か！誰かいないの！？」

村中を大声で叫んで回る。しかしこの問いに答えてくれる人は誰もいなかった。

呼びかけながらまだ形が残っている民家に人がいないか探し始めた。

「誰か！答えて、返事して！！」

女の叫びは虚しく無人の村へ吸い込まれていった。

村を一通り探し終わり誰もいないことを確認し、虚無感と絶望感、そして極度の疲労により座り込んでしまった。

「どうして、誰もいないのよ・・・。」

夫の死だけでなく、半日村を離れている間に出来ていた原因不明のクレーター、それに呼応するように消えてしまった村人達の姿、それらのことにより精神的に限界が来ていたのが女の命運を分けた。

村人の捜索中にあえて近づかなかったクレーターに足を踏み入れた。クレーターの中央部に近づき、クレーターの中央にさらに5メートル程の穴が空いていることに気がついた。

クレーターに近づき、その穴を覗き込んでしまった。

森の中を獣道に沿って歩いていた。

延々と続く山道を数十分ほど歩いたところだろうか、唐突に森が途切れた。

周囲を見回してみると、どうやら柏村の近くにある山の麓らしかった。

森へ踏み入る前に、行商に見させてもらった柏村周辺の地図を思い出した。

山の麓に沿って歩いて行くと北に川があり、さらにその川を上っていったところに柏村があったはずだ。

そう思い起こすと山の麓を北上していった。

しばらくそうして歩いていると、どこからか食欲をそそる匂いが漂ってきた。

ちようど昼時で腹が空いていたこともあり、誘われるようにフラフラと匂いのほうへ足を向けていた。

匂いを辿って行くと、人が何人も平気で入れるだろう大きめの洞窟を見つけた。

匂いはどうやら洞窟内から漂ってきているようだった。

少し迷ったが匂いと情報を仕入れておきたかったのとで洞窟に足を踏み入れた。

洞窟内を少し進むと匂いの元はすぐに見つかった。

30人程度の老若男女が食事を摂っていた。

「すいません。この周辺のことについてお聞きしたいことがあるのですが、よろしいでしょうか？」

全員が食事の手を休め、男を見つめたあと、また何事もなかったかのようにすぐに食事に戻った。男はここにいる者たちの目を見て愕然とした。

ほぼ全員の目に生気が感じられなかったのだ。

全員で何か恐ろしい体験でもしたのか憔悴しきっていた。

そんな中でここにいる者たちの世話をしているのか一人で動き回っている女がいた。

年の頃は男より少し若い程度だろうか、髪は肩で揃えてあり色はブラウン。

くりくりとした大きい黒い瞳、身長は150cm弱といったところか、キレイというよりはかわいらしいという言葉がしっくりくる容姿をしている。

他の者達の間をパタパタと走り周って食事を配っている。

忙しうなので落ち着くまで勝手に待たせてもらうことにした。

しばらくすると全員に配り終えたのか食器を持ってこちらに近寄って来た。

「ごめんなさい。他の人じゃ対応が出来そうにないから聞きたいことがあるならどうぞ。あと一応あなたの分の食事も持って来たんだけど、余計なお世話だったかな？」

人懐っこいよう笑みを湛え、特に警戒するでもなく話しかけてきた。全員分の食事を配り終え、自分の分と、それに男の分の食事まで持ってきてくれたらしい。

「ありがとう。いただくよ。」

男はそう答えて手を伸ばした。肉や山菜などがふんだんに使われたスープだった。

スープを受け取り、食事を終えるまでお互いに黙っていた。

食事を終え女が食器を片づけるのを待ってから話を切り出した。

「そうだな。いろいろと聞きたいことが増えたがとりあえず自己紹介から行こうか。俺の名前は満月^{みつぎ}だ。短い間だろうかよろしくな。」

満月と名乗った男はそう言って右手を差し出した。

少女は差し出された手を握り返す。

「たぶん全部の質問には答えられないと思うけどね・・・。」

そう言っただけの子は生気を感じられない人々のほうを見た。

どうやらこの惨状の原因は知らないらしい。

「あ、そうそう！私の名前は時雨^{しぐれ}っていうの！よろしくね！」

1章：出会い（2）（後書き）

サブタイはこれでいいのか疑問を抱きつつ、そのまま進めております。

わかりにくかったらすいません・・・。

しかし3部分目まで来てしまったのでこの作品はこのままゴリ押しで行きます。

問題があれば次回から変えようと思います。

2章：異変

女は穴の中を覗き込んだ。

穴は結構な深さがあるようで、奥のほうが暗くなっておりよく見ることができなかった。しかし、次第に目が暗さに慣れ始め穴の奥が見えるようになったときに異変に気づいた。

穴の中に何か山積みになっているようだ。

それを見ることに本能的な恐怖が湧きあがったが、それが見えるようになるまで、声を上げることも、それから視線を逸らすこともできなかった。

口内がカラカラに渴き、目を背けたくなくても瞬きすることすらできずにそれを見てしまった。そして目が暗さに慣れたとき女の視界に映されたものは

前日まで共に過ごした家族とも言える村人達の屍の山だった。

あるものは体の半分以上が炭化し、あるものは頭が半分ほど何かに食いちぎられたように消滅していた。

体から誰なのか判別できるものはいい方で、中には体が完全に炭となり、生きていた時に男だったか女だったのかの区別すらできないもの、何者かに食い荒らされもはや体のどの部分なのかさえわからないものなど、およそ人間には行うことが出来ないであろう地獄が広がっていた。

「う、うああ……。」

女は悲鳴をあげることすらできずにその地獄を見ていることしかできなかった。

その時、視界の端に何か動くものを捉えた。

この惨事を引き起こした元凶ではないかと思い、声を止めそれを見た。

奥歯は歯の根があわず逃げたくとも腰が抜けてしまい逃げることにすら叶わなかった。

絶望の中でその動くものを捉えこの訳のわからない状況で不覚にも安堵してしまった。

それはよく知っている顔で最近では夫の次によく話すようになった者だった。

夫の弟である。

片足が根元から焼かれ途中からなくなっていたが、知った顔がいた。まよひ
ことに安堵し思わず声をかけた。

「真中さん！大丈夫ですか！？」

真中はその声を聞いて驚き、大声で怒鳴った。

「義姉さん！！逃げてえええー！！！！！！！！！！」

そう怒鳴った真中の後の山が唐突に盛り上がった。そしてそこから見たこともない異形の生物が飛び出してきた。

女はそれを見て完全に言葉を失った。

それは4メートルに届くのではないだろうかという巨体で、その姿はヤモリと鶏を足したような奇怪な化け物だった。

本体はヤモリのようにでありながら頭にはトサカが付いており、足はヤモリのもではなく鶏の脚になっており、腕には飛ぶことができるのか蝙蝠のような羽が生えていた。

その化け物は真中を羽の付いた腕で掴むと先ほど出てきた穴に引きずり込んだ。

「うわあああ——！！！！義姉ざっ！がっ！ぎいい！！あゝあ

あゝ あゝ ああ——！！！！！！あ、あゝ

•
•
•
○
L

真中の悲鳴が途絶え、静まりかえったその場所には、ぐちゃつくちゅつという咀嚼音が支配した。

動くことも声を上げることでもできずただ震えた。

どれくらいそうしていただろうか、気がつくと咀嚼音が消えていた。いったいいつの間に移動したのか、穴の中で女の足元に近い壁に手をかけよじ登ろうとしていた。

次の標的を女に定めたようだ。

「ひっ！！」と小さい悲鳴を上げると這うようにして化け物から逃げ出した。

化け物は穴から出ても、急に距離を詰めるようなことをせず、遠くから獲物の動きを観察しているようだった。

獲物をいたぶるのを楽しんでいるようにも見える。

恐怖で動かない体を必死で動かす。

逃げて行く方角には村で崇められている祠があった。

祠は入口が狭く、人が一人やっと通れる程度の大きさなので女はそこへ逃げ込もうと思ったのだ。

そしてもう少しでその祠に辿り付けるところで、化け物が動いた。

少し首を引くような動作をしたと思ったら、とても長い舌を女の足に巻きつけた。

足に伝わるぬるぬるとした感触による嫌悪感と、目前に迫っている死への恐怖で発狂しそうになりながらも化け物の方へ引きづられまいと地面に爪を立てた。

爪が弾け飛び、血が出ても引きずられまいと足掻き続けた。

女は恐怖から化け物の方を振り返った。

先ほどまでは顔の位置が少し高く気がつかなかったが、腹の下に何か色の違う部分が見えた。

「え・・・？」

さも訳がわからないというような声をあげた。

その色違いの部分は人の顔だったのだ。

それも女がよく見知った顔だったのだ。

その顔は昨晚のうちに処刑されたはずの夫の顔だった。そしてそれ

が、女が見た最後の光景となった。

「そうだな。色々聞きたいことはあるが、まずはスープをありがとう。うまかったよ。それで質問なんだが、君、というかここにいる者達はいったいどこから来たんだ？ずっとここで生活していた訳でもないだろう？」

自己紹介を終え、満月はこの洞窟内で彼女らを見つけてからずっと疑問に思っていた質問をした。

「うん・・・。私たちは3日前からこの洞窟内で生活してたの。皆が見ての通りだから私が食事を作ったりしてね。理由はわからないんだけど、私たちの住んでた村はもう人が住めなくなっただって。」

時雨は気がついていないが、満月の動きが凍ったように動かなくなっただ。それを聞いて言い知れぬ不安を抱いたのだ。その村はまさか・

「私たちの住んでた村、柏村って言うんだけどね。」

「！？」

その村は満月の行こうとしていた村の名前だった。顔にこそ出さなかったが、満月は苦虫を噛み潰したような心情になった。

「ところで、満月はどうしてこんなところに来たの？」

時雨に話を振られ、内心の動揺が声に出ないように気を配りながら答えた。

「ん。ああ。住んでいた村を追い出されてね。仕方なしに旅をしている訳さ。」

両手をやれやれというように手をあげた。

「ええ！？遠くの方だと夜道に異端者が襲ってきたり魔物が出たりするんでしょ！？」

本当に驚いたという声を上げた。

時雨からは見えなくなっているが、異端者と聞いた時に後ろの村人たちがびくつ！と反応していたのを満月は見逃さなかった。

「まあ確かに出ることは出るがそんなことはほばないと言っているからな。それよりは頻繁に襲ってくる野犬の群れの方が怖いさ。」

実際に満月の言うとおり、異端者や魔物などは年に1〜2回起こるか起こらないかという程度のもので、街道をはずれたり、わざわざこちらから出向いたりしなければ襲ってくることはないのだ。

「ふ〜ん。でも野犬の群れはどうにかしてるんでしょ？満月って凄いいんだね！！」

笑顔でそんなことを言われ、不覚にも満月は照れてしまった。

素直に称賛されて悪い気などするはずがない。

照れ隠しにそこまで凄いいことじゃないと言って手を振った。

「それじゃあ異端者とか、魔物とかとは会ったことないの？それにこんな大陸の端っこの方まで何しに來たの？」

時雨は興味津々といった具合に身を乗り出してきた。

「異端者や魔物と言った具合のものとやりあったことはないな。何しにと言われてもな。締め出された村に帰れないからな。世界中見て回ろうか思ってる。それともう一つとても重要な理由がある。」

満月が急に真顔になり声のトーンを落としたので、時雨はごくんと唾を飲み込み、重要な理由？と繰り返した。

「ああ、これは俺の一生に関わるような問題だからな。聞きたいのなら覚悟を決めた方がいい。」

時雨は少し悩み、結局は好奇心が勝ったのか続きを促した。

それを見届けて満月はため息をつき、時雨の手を取り、最後の確認を取った。

「本当にいいのか？今の状態でこれを聞いたら必ず後悔することになるぞ？それでもいいのか？」

時雨は満月の目を見てしつかりと頷いた。

好奇心で目が輝いているような錯覚を受ける。

満月はため息を付き教えてやった。

「嫁探しだ！」

強く、それはもう堂々と言いきった。

時雨は今の言葉が理解できていないのか、言葉がわからない赤子の
ように呆けている。満月はそんな時雨に追い打ちをかける。

「という訳でな。時雨、旅を終わらせるために俺と結婚してくれないか？」

手を少し強めに握り手を顔の前までもち上げた。そして目を見つめながら、告げた。

「え？ ええ？ え
え
え
え
ええー！！！！」

洞窟内に時雨の絶叫がこだました。

それは見ていた。

子供達の楽しそうな姿を、元気な声を、遠くの方から眺めていた。

それは、あの中に入って行きたかった。

だがそれは入っていくことはできなかった。

よくわからないがあの中に入って行っ
てはいけないと本能でわかっ
ていた。

それはあそこで遊んでいる子供達とは違う存在なのだと、決して相容れることのない存在なのだとわかってしまっていた。

だからそれは見ていた。

飽きることなくいろんなことをして遊ぶ子供達を、日が暮れるまでそれは飽きることなくずっと……。

日が暮れると親が迎えに来て去ってしまうその時まで、それは人間には知覚することのできない存在だった。

それは生まれてからとても長い間を一人で過ごしてきた。

それには死という概念が存在せず、ただそこにあるだけの存在だった。

ある時からそれは願うようになった。

人間にはそれを視認することができない。

動物ではそれと会話する知恵がなかった。

そしてそれは願うようになった。

それを視認し会話をすることのできる存在を、ただただ願った。

もう一人でいるのは嫌だと・・・。

2章：異変（2）

男がいた。

いつからいたのか、そこにずっと立っていたのかはわからないがそこにいた。

頭から顔も見えないほど深い襦袢を身にまとっているが、何故だか男と認識できた。

男は何をするでもなくその方角を向いていた。

男の体が向いている方角では、ヤモリと鶏を足したような化け物が人を貪り食っていた。

ぐちゃぐちゃという咀嚼音が届いている。

ふと気がつくと男の姿は消えて、そして化け物の目の前に移動していた。

化け物は唐突に現れた目の前の存在に驚いたようだ。

化け物は今まで見てきた餌とは違い、逃げるそぶりも見せないその襦袢を身に纏った存在に言い知れぬ恐怖を抱いた。

そして化け物が威嚇の動作をしようと翼を広げた時には既に全てが終了していた。

男は化け物に食われた女に近づくとそつとその遺体を抱き上げた。遺体を抱いたまま村の中央へ歩いてゆく。

男が歩き去った後には原型をなくした化け物の肉塊が転がっていた。

村の中央の穴、村人全員の遺体があるだろう場所に女を入れてやった。

この時、突風が吹き男の顔を隠していた襦袢が風に舞った。

そこには銀髪・銀色の瞳をした男が立っていた。

とても悲しそうな顔をして拾って来た農作業用の道具で村人達の入っている穴を埋め始めた。

その作業は日を跨いで続けられ、飲まず食わずで行われた。

男は振り返ることなく無人の村を去って行った。後には中央のクレーター部分が少し盛られており、そこに大量の花を供えられた墓と思われる物だけが残っていた。

ブスツとした顔で時雨しぐれは他の皆の晩御飯を作っていた。

時折何かを思い出したのか、林檎を思わせるほど顔が真赤になる。

そしてぶつぶつと何かを呟いていた。

その光景を遠巻きに見守る男、満月の頬には引つ叩かれた後が痛々しく残っている。

時雨が頬を染めたまま満月の方へ視線を向けた。

満月がそれに気が付き手を振ると、慌てて眼を反らし、晩御飯を作っていますと言わんばかりに音を立てて再開する。

嬉しかったのにと聞こえてきたときは苦笑いするしかなかった。

いまだに相当動揺しているらしく、満月は切り分けた山菜のサイズがバラバラだな・・・。

うわあ……スープに砂糖入れたよ……。

などと時雨の方を見ていた。

・・・最初から貰えないとは思うが、今晚の食事は遠慮させてもらうことにしよう。

昼に満月が結婚を申し込んだあたりまで遡る。

「え？ ええ？ えゝ えゝ えゝ えゝ えゝ えゝ——！！！」

時雨の絶叫が洞窟内にこだました。

「いや、あのね？私達って初対面なんだよ？今日初めて会ったんだよ？」

と時雨が見ていてかわいそうなほど動揺し、子供に言い聞かすように答えた。

「そんなものは関係ないだろう。それともあれか、俺では不服なのか？」

満月がきつぱりと切り捨て、少し悲しそうな顔して更なる追い打ちをかける。

もちろん手を離さず、目はしっかりと時雨を見つめている。

例えるなら左フックが綺麗に顔面に決まった感じた。

時雨は視線を逸らしながらおろおろしだす。

「いや、不服とか、そういう訳じゃないん、だけど・・・。」

時雨は途切れ途切れ混乱しながらそんなことを言う。

「それとも単純に俺のことが嫌いなのか？」

泣きそうな顔をしながら満月は時雨に詰め寄る。

続けて右ジャブも顔面を捉えた。

時雨の顔はこれ以上無理！というほど顔が赤くなっていた。

「うえ！？嫌いじゃない、嫌いじゃないよ！だけどそういうのは、

もつと時間をかけてね？」

そんなことを言った。

苦し紛れの右ストレートだ。

「それはつまり、時間をかければいいということだな！！？」

泣きだしそうな顔をして顔を伏せていた満月がそう言って顔を上げた。

とても嬉そうである。

右ストレートは軽々避けられ、それに合わせたカウンターが決まった。

「うぐ。えと、うう？」

変な呻き声を出し、時雨は混乱し訳がわからないようだ。

そんな状態の時雨を、満月はさらにめった打ちにする。

「長い旅も時雨のおかげで終わりそうだ。ありがとう時雨。そしてこれからよろしくな。」

「え？え？私はまだ満月と結婚したりしないよ？」

満月は笑顔でそういうと、時雨は反射的にそう答えた。

「まだということは将来的に結婚するということだろう？なら問題はないな。」

「えと、あの、あのね？」

時雨は混乱しきっておりまともに発言できなくなっていた。

さらにワンツーがもろに当たり、もはや腕のガードをあげることも出来ないようだ。

「それとも、やはり俺のことが嫌いなのか？」

と悲しそうな顔をして満月は更に強烈な一撃を放った。

それは強烈なボディーブローだった。

「う？う？」

時雨はかわいそうなくらいの涙目で戸惑っている。

ボディーブローが綺麗に決まったようだ。

「時雨、もう一度言う。」

ここで少し間を置き、時雨の目を真っ直ぐ見詰めながらしっかりと言った。

「俺と、結婚してくれ。」

カンカンカンカン！！KOのゴングが鳴り響いた。

止めはボディーブローを食らい前かがみになったところへのアップーだった。

そして時雨は耳まで真赤になりながら、しばらくおろおろしたかと思つと深呼吸した後、しっかりと満月を見つめ返した。

「満月。君の気持ちはわかったよ。だけど」

「冗談だよ。」

途中まで言いかけたところで満月が言葉を被せた。

時雨が呆然としている。

満月は意地の悪い笑みを浮かべている。

「いやいや、面白い物を見させてもらった。」

くつくつくと笑いながらそんなことを言う。

時雨はまだ状況が掴めていないようであ？え？と言っている。

「時雨。」

満月が時雨を呼ぶ。時雨は困惑したような眼で満月を見る。

「お前、かわいいな。」

本当にそう思っているらしく、何の気なく満月は言った。

時雨はそこで一瞬何を言われたのかわからないといった顔をした。

一拍置き時雨はまた残念なくらいに顔を赤くすると、満月の頬を引っ叩いた、洞窟にパーンと、いい音が響き渡った。

それから数時間ほど満月は誤りながら付いて回ったが、結局一言も口を聞いてもらえないまま晩御飯となったのである。

仕方がないので離れて保存食での質素な食事をしているところである。

「何もそこまで怒らなくていいだろうに。まったくいつもこいつも冗談が通じなくて困る。」

満月は虚空を見つめながら独り言のように呟いた。

そして保存食を食べ終わり、愛用しているナイフの手入れを始めた。そこへそれまで沈黙を守っていた時雨が二人分の食事を持って寄って来た。

「どうせ何も食べてないだろうから持つてきてあげたよ。さっさと食べてね。片づけないといけないんだからね。」

そう早口に言って頬を染め、目を逸らしながらスープの皿を置いて行った。

「は？ちよつと、いや待っ」

満月はそう呼び止めたが、時雨は聞こえない振りをして少し離れた岩に座って食事を始めてしまった。

・・・これを、食えと。

目の前には変に異臭を放ち、火の通りが不十分で生焼けの肉と生の山菜が不揃いで入った危険信号を放つスープがあった。

周りを見る。誰一人として変な顔をするでもなく口に運んでいる。時雨以外はそうだろうと思っていた。

だが、なぜお前まで平気な顔して食べてられるんだ？味覚は大丈夫

なのか？いくら野宿慣れしているからといっても、端から毒とわかつてる物を食えるほど俺の胃袋は頑丈じゃないぞ？その時、時雨がこちらを向き不安そうな顔をした。

・・・これは、あれか、いたいけな少女をからかった罰か？俺も少しやり過ぎたとは思ったが、いくらなんでもこの罰は重すぎやしないか？死ぬぞ？

「おいしくなかったかな？手が止まってるみたいだけど・・・。」
そんな涙目の上目づかいでこっちを見るな。
食わない訳にはいかなかったじゃないか。

・・・

・・・わかった。俺も男だ覚悟を決めよう。
時雨、生きていられたら今度はちゃんとした物を食わせてくれ。
いや、食べさせてください。

そして、満月はスープ（？）を口に運んだ。

「・・・。」

満月の動きが止まった。

時雨はその様子を不安そうにじつと見ている。
たっぷり数秒が経過し満月が動いた。
スープを一気に口の中へ流し込み。

「時雨、食器はここに置いておくぞ。俺は外で風にあたってくる。」
そう言つて食器をその場に置き、洞窟の外へ歩きだした。
出ていく前にうまかったぞと顔を見せずに言った。

時雨はその一言で笑顔になった。

満月は洞窟の外に出ると茂みの中に入って行き、盛大に戻した。

それは見ていた。

男と女が楽しそうに会話をしている姿を、それを見て悔しくなった。

それは隣に堂々と立つことが出来ないというのに、たったつい先ほど知り合ったばかりの他人がそこに居座っているということが、それにはとても許せることではなかった。

それは影から見守っているというのに、男に至っては初対面だというのに結婚を申し込んだりしている。

女のほうも満更でもないようだ。

それはその光景を見て誓った。

このことを決して許しはしないと。

2章：異変（2）（後書き）

この辺りは「ギャグ要素あったほうがいいんじゃない？」という友人の意見を参考に後から無理やりぶっ込んだ感じの場所なのでネタに走り過ぎた感が・・・。

2章：異変（3）

男は村の奥にある祠に来ていた。

祠は大切に祀られていたらしい。

少し迷ったが祠の中に入ることにした。

何故か御本尊に村の惨状を伝えておこうと思ったからだ。

祠の奥はとても暗く足下もまともに見えないような状態だった。

そうして5分ほど歩いただろうか、道の少し先に僅かだが光が見えた。

近づくにつれ徐々に光が大きくなっていった。

近くに川でもあるのか水の流れる音が聞こえる。

そして目を覆う程の光と共に空けた場所に出た。

目が光りに慣れるまで少し時間がかかったが、光に慣れ目の前の光景を見て、男は言葉を失った。

男の目の前には巨大な氷柱があった。

岩に発光するものでも含まれているのか、壁面の全体から光が出ているようだ。

その光の中心に大きすぎる氷柱が鎮座していた。

その氷柱に光が反射しまるで生きているかのように色を変えている。

村人が崇めているのも頷けた。

だがそこに足を踏み入れた時から妙に視線を感じるのだ。

あたかも氷柱に観察されているかのようなだった。

気のせいだろうと思い、男はそこに膝を付きここを崇め奉った村人の最後を伝えた。

本当は言葉にするつもりなどなかったのだが、何故かそうしたほうがいいように感じたのだ。そして一通り伝え終わり、そろそろ行くかと腰をあげたところで、どこからか声が聞こえてきた。

満月は洞窟の中で呻いていた。

夜に出された食事が原因で腹痛を起こしていた。

時雨は寝る前に変なことをしてきたら許さないと言っていたが、時雨、君の作った毒劇物のおかげで明日まで地獄を見そうだよ。と心の中で呟いた。

さらに困ったことに俺が悪夢でうなされているとでも思ったのか、時雨は献身的に汗を拭ってくれている。元はと言えば自業自得なのでとても心苦しい。

だが不快な汗を拭ってもらえるのはとてもありがたいので寝たふりを決め込む。

1時間ほど過ぎるとさすがに腹も落ち着いてきて、このまま寝よう思った。

直後にぽたぽたと何かが頬に当たっていることに気がついた。

薄眼を開けて見てみると、どうやら時雨が泣いているらしい。

細かい事情は聞いていないが柏村で何かあったらしいことはわかるのだが、事情がわからないままこの洞窟で暮らしているということなのでやはり不安なんだろう。

ふむ、これ以上この娘に情が移る前に柏村に行った方がいいな。そこで現状を確かめ報告してやったほうがいいだろう。

満月はそう決めると襲ってきた眠気に身をまかせることにした。意識が消える前に聞こえた時雨の言葉が印象に残った。

「お父さん。ごめんね。」

満月が寝るまでずっとごめんねと繰り返して呟いていた。

満月と時雨がいる洞窟の奥に蠢く影があった。

それは影の濃い場所に隠れ洞窟内の様子を窺っていた。

影は気配を殺しながら様子を見た。

どうやら数十の餌がいるようだ。

その中に何故か自分と同じ異端の者が二人混じっているらしい。

影の主は折角の餌場だがここを襲撃するのは部が悪いと察したのだが、自分の巢にいた餌はもう全て食べ終わってしまった。

自分が生まれたとき、何故か餌が周りにはたくさんおり、生まれたばかりでお腹が空いていたので餌は全て食べつくしてしまった。

そして外に出ると大量の餌がこちらを見て恐怖に顔を歪めていた。本当にたくさんいたので手始めに近くにいた餌を食った。

その瞬間、他の餌から怒号のような悲鳴があがった。

そこからは楽しかった。

逃げ惑う餌を追い詰め食らう。

狩りがこんなに楽しいものとは思わなかった。

狩りをしているときに気がついたことがある。

餌には色々な種類があり小さく柔らかいもの、大きくて硬いもの、骨筋張っているもの、肉の柔らかいものだ。

小さくて柔らかいものが一番うまく、骨筋張っているものが食う部分も少なく何より不味かった。

そうして試しているうちに周りに餌がいなくなってしまうていた。

餌を狩り終えたとき、よくわからない集団に襲われた。

匂いで餌とわかったが、食べようとしてもとても硬く、食えるものではなかったので捨ててきた。

無念に思いながらも狩りで捕らえた他の餌を全て平らげ、逃げた餌を探して周囲を探ってみると足跡を見つけた。

その足跡を追っていたところ、この洞窟に辿り着いたのである。

そこには餌もいたがそれ以上に自分では敵わないであろう同類が二人もいたのだ。

こんなことは餌を探しているうちに何度かあり、その度に泣き寝入りしてきたのだが、今回はなぜかそれをする事ができなかった。同類の、人で言うならば雌にあたる方、なぜかあの雌に強く惹かれ

るものがある。

どうしてかあの雌だけは雄の方の同類に渡したくはなかった。

だから影に隠れ様子を見守っていたのだ。

影の主は身動き一つせず獲物が動くのを待っていた。

そうして長い時間を待ち続け、絶好の機会が訪れた。

時雨は泣きはらした目で洞窟の外を見た。

気がつくと洞窟の外が明るくなっていた。

どうやら夜が明けてしまったらしい。

真夜中に満月が苦しそうに呻いているのを見て床に伏した父親の姿を重ねてしまった。

苦しそうにしているのにどうしてやることもできず、寝汗を拭いてやることしかできない自分の無力さに悔しくなったのであった。

朝御飯の準備をする前に顔を洗ってこようと時雨は立ち上がった。

今の顔を満月に見られたくないと思ったからだ。

こんな後ろ暗い自分をかわいいと言ってくれた人の前では、せめてかわいい自分を演じていたかった。

どうしてそんなことを思うのか、その理由はこの一晩で嫌というほどわかってしまった。

自分はこのどこから来たのかも旅の目的もわからないが、自分の作った料理をうまいと言ってくれた、自分のことをかわいいと言ってくれた、この若者に恋心を抱いてしまったのだ。

昨晚、満月が苦しそうに呻いている姿を見て、しばらく父のことを完全に忘れてしまっていた。

そのことを看病している最中に気が付き泣きはらしてしまったのだった。

だが、満月は旅人で自分は柏村の住人、自分は村を離れて暮らせるほど強くない。

だからこそ、せめて自分の抱いたこの気持ちは旅立つであろう満月に知られたくはなかった。

行こうと呟いて泣きはらした目をこすりながら、ついでに今日一日分の水を汲んでこようと形の悪い手作りの桶を持って洞窟の外に向かって歩きだした。

2章：異変（4）

「お主、なぜそんな報告をしに来た。」

檻褸を纏った男の頭上、氷柱の中心付近に女が一人浮いていた。腰まである水色がかった長い髪、目つきは少し怒っているように見える形をしている。

瞳は頭髪と同じ水色で、身長は160cm半ばくらいだろうか、豊かな体つきに白い着物を着こんでいた。

男は突如空中に現れた女の存在に驚き数瞬だが思考が停止した。

「聞こえなかったのか？何故お主はここにそんなことを告げに来たのだと聞いている。」

その様子を見て、不機嫌そうに初対面のはずの男に空中からやたら高圧的に問いただしてきた。

男は理由を考え、「なんとなくだ。」と答えてやった。

本当に理由はなく、ただなんとなく最後に女が逃げようとした先に何かあるのかと足を運んだだけだった。

「お主は我と同じであろう？たかが人間の死にそのような悲しそうな顔をしているのだ。」

どうやら悲しそうな顔をしていたらしい。

自分のことなのだがまったく気が付いていなかった。

男は「さあ、どうしてかな。」と言いながら微笑んだ。

「お主はわけもわからず行動するような阿呆なのか？下手をすれば自分が殺されてもおかしくない状況だというのに、それを行った者を葬り、すでに死んだ人間をまとめ墓を作ってやるなど、我の同類とはとても思えぬ。お主はいつたい何を考えておるのだ？」

正面切つて罵倒されたかと思えばお前は意味不明だから説明しろときた。

男は思わず吹き出してしまった。

女はそれを見て気を悪くしたのか、不機嫌そうな顔をした。

男は一言謝ると「どうやら俺は阿呆らしい。」と短く答え笑った。本当に何も考えずに行動していた。

魔物に女が食われている光景が昔見た悪夢を蘇らせ、自分を抑制する前に魔物を切り刻んでいたのだった。

「お主は自分で阿呆と認めるのか、変なやつよのう。ところでお主の話では我を崇めていた人間共は全滅らしいの？」

男はその質問にはつきりとわかるように頷いてやった。

女は村のあった方角を見つめそうかと短く呟いた。

なんだかんだと言いながら自分のことを崇めていた者達がいなくなったのはやはり悲しかったのであろう。

一瞬ではあったがとても悲しそうな顔をしていた。

男はこれ以上この場に居座る理由もないので引き返すことにした。

「待て。お主、我を連れて行け。下手をすればもう二度と誰も来ないであろうこの場所にいたうないでな。それでは何も面白いことはないのう。こんな所に閉じこもっているよりお主に付いて行った方が面白そうじゃな。断ったところで勝手に付いていくのでう。諦めて連れて行くがいいぞ。」

女は堂々とそんなことを言ってくれた。

男は深く溜息を吐くと、女に背を向け「勝手にしろ。」とだけ言って歩き出した。

「では勝手にさせてもらおうかの。さてさてとりあえずは自己紹介はしておこうかのう。」

女がそう言いながら後ろに付いてきた。

もちろん浮いたままである。

「我の名は水守みもりという。これから先よろしく頼むぞ。」

男は浮いたままの女を見つめ、「俺の名前は——だ。」と振り向きもせず名前をつけ、祠の外に向けて歩き出した。男は微笑を浮かべていた。

薄暗い洞窟内で満月^{みつぎ}は眼を覚ました。

昨晩は自業自得とはいえ酷い目にあったものだ。時雨^{しぐれ}の作った毒劇物を食わされたのである。

おかげでよく眠れなかったために寝不足気味で、まだ腹に残っているなんともいえない異物の感触で大変気分が悪い。

早く柏村に辿りつきたいところだが、ここでもう一泊ほど時雨のお世話になっておこう。

ただし時雨をからかうのは死活問題に繋がるのもう二度としないと誓った。

『また腹痛が原因で時雨に看病などさせられないしな……。』
などと考えたところであることに気がついた。

時雨がいないのである。

洞窟内を見回してみると時雨以外にも水桶が見当たらなかった。

時雨が水を汲みに行ったと考えるのが妥当だろう。

そこまで考え、もう一眠りしようかと毛皮に包まったところに悲鳴が届いた。

満月は悲鳴の主を瞬時に理解すると人ではありえない速度で走り出した。

満月が起きる少し前、時雨は水を汲みに行こうと桶を持って立ち上がった。

『朝ごはんどうしようかな……。』
などと考えながら歩きだそうとした。

満月はどんなのが食べたいのかなとふと考え、満月の寝顔を見た。起きているときはなんだか怒っているような顔をしている満月だが、寝顔はとても穏やかでどことなくかわいらしく見えた。

もう少し近くで見してみようかなと顔を近づけた。

いたずら心で頬を突いてみたり、髪の毛をいじったりしていると、満月が不快そうに顔を歪めると寝返りをうつた。近づいていた時雨は寝返りの拍子に抱き枕のように抱きかかえられてしまった。

うう？あれれ？と満月の腕の中でもがいている
本当に混乱しているのが遠目にもわかる。

さらに腕の中で暴れた影響で、服がまくれ上がってきてしまっているのに気がついたとき、異性との接触がほとんどなかった時雨は大パニックに陥った。

急いで服を直そうと必死で手を伸ばそうとするが満月の腕に押さえつけられていて動かすことができない。

服はへそどころか胸元までまくり上がってしまった。

時雨は「服が、服が。」と繰り返し、羞恥で涙目になっていた。

時雨が羞恥と混乱で目を回していると、とどめとばかりに満月が更に抱き寄せた。

ふえ？と涙目で呟いた時雨はそのまま抱き寄せられ、服を直そうと下に向けていた顔を咄嗟に持ち上げてしまった。

満月が再度寝返りをうち逆側に向いたとき、寝返りをうつ前に向いていた側には色々な感情により身動きの取れない、そしてこれ以上赤くなったら死んでしまうのではないかというほど真赤に染まった時雨が転がっていた。

たつぷり5分ほど経ってようやく時雨は立ち上がった。

どこかぽーっとした顔をして満月を見下ろした。

そのとき無意識に時雨は満月の唇に目を向けた。

そこで正気に返り、また顔を真っ赤に染めると桶を持って洞窟を飛び出した。

時雨は真っ赤になりながら川まで走ってくると、持ってきた桶に水を汲んだ。

川に顔を近づけたとき、自分の顔が水面に映し出された。

自分でもびっくりするほど顔が赤くなっており、思わずといったよ

うに唇に指を当て、そしてまた頬を真っ赤に染めた。

時雨は顔を洗う他にも熱を冷ますといった理由で顔に水をかけた。

川の水は冷たく火照った顔を冷ましてくれた。

少し落ち着いて、顔の火照りも冷めたころそろそろ朝御飯の準備を始めないといけないなと思い、桶を持って洞窟に向かおうと立ち上がった時だった。

時雨の後のほうで歩くような物音がした。

時雨は満月が来たのかと少し期待して振り返ると、そこに、異型の姿をした化け物がいた。

「え？きやあああああ！！！！！」

時雨はその異型を見て悲鳴を上げた。

その化け物は5mに届きそうな巨大な魚の体を持ち、百足のような脚を体から生やし、螳螂の鎌のような腕を持っていた。

異型は時雨に近寄りながら笑うように口を歪めた。

魚の口をしている割にその口には牙が生えていた。

時雨は後ろに川があり退路がなくなっていることに気がついた。

化け物はある程度の距離まで近づくと立ち止まり、そして時雨のよく知っている声で話かけてきた。

2章：異変（4）（後書き）

サブタイが合っていない？
キノセイデスヨ

3章：時雨拉致

病にかかり寝ている時雨の父に勢いよく斧を振り下ろした。斧を持つているのは時雨の父である嵐あらしの弟である梅雨つゆである。斧は嵐には当たらず、嵐の最後を見届けに来た村人達に向って振り下ろされた。

むろん当たってはいない。

「梅雨！貴様、どういつつもりじゃ！！」

村長がそう叫んだ。様子を見に来ていた村人も困惑していた。梅雨は涙を流しながらも口に笑顔を貼り付け答えた。

「兄さんを守る為ならなんでもするさ。」

そう短く答えると斧を構えなおした。

村長は切羽詰まった様子で梅雨を説得しようとする。

「梅雨よ！このままでは村が全滅してし」

「だから？すればいいよ。兄さんを殺そうとするやつらなんか。」

梅雨は村長の言葉を途中で遮ると酷く冷たい眼をして告げた。

他の村人が少しでも動こうとすると斧を少しずらしてそいつに向けてる。

「考え直すのだ！どうせもう嵐は助かりはせんのだ！」

嵐を侵食している異型は、すでに顎にまで達している。

本当に嵐には時間が残されていなかった。

「黙れよ。お前らは自分たちが死にたくないだけだろ？」

梅雨は知っているとばかりにどここうとしない。

異型に浸食された者の最後くらい梅雨だって知っている。そうして梅雨が村人を遠ざけていた時に、それは起こった。

兄である嵐の頭が爆ぜた。

そして爆ぜた頭から異型の小さな生物が飛び出してきた。

それを見た梅雨は笑顔になる。

「兄さん。こつちだよ。」

そう言つて手を差し伸べる。

30cm程度の魚のようなその異型の生物は様子を見るようにこちらを向いて停止していた。村長が何かを叫んでいるが聞こえなかった。

その異型は梅雨の脚に取りつくと、這い上がり梅雨の口内に侵入した。

梅雨は一言唸るとその場で動かなくなった。

「全員急いで避難するんじゃー!!」

そう村長が叫ぶのと梅雨に異変が発生するのはほぼ同時だった。梅雨の体が瞬時に兄のような魚の鱗をまとったかと思うと膨張し始めたのだ。村長が必至に叫んでいるが嵐の頭が爆ぜたあのと看、すでにどうしようおもないほど、手遅れだった。

梅雨の膨張が止まったかと思うと、膨張したものから何本もの足が突き出した。

足はしっかりと地面を踏みしめ立ち上がると、最後とばかりに膨張部から螻蛄のような鎌が飛び出した。数瞬前までは梅雨であった生物は完全な化け物となり村人にその鎌を振り下ろした。

そして殺戮が始まった。

その頃、時雨は村のはずれで泣いていた。

時雨はしゃくり上げながら父のことを思い浮かべていた。

時雨に母はいない。記憶が残っていないほど小さい時に、父と呼んでいる嵐に拾われたのだった。

拾われた当初のことは覚えていないが、今では覚えていない自分を捨てた生みの親より、捨て子である自分を拾い、育ててくれた嵐は本当の父親と言えた。

それが村の掟による死刑という悲しすぎる別れ方をするとは思って

いなかった。

もう会えないのだと思ったとき、死刑の場にとどまることなどではしなかった。

そうして家を飛び出し、村のはずれで泣いていたのである。

しばらく泣いていると、村の方角から悲鳴があがった。

何事だろうと村の方を振り返ってみると村から数十人ほどが走ってきた。

事情を聞こうと立ち上がったとき、先頭を走っていた村人は「逃げるぞ！急げ！」とだけ言って時雨の腕を掴むと走り出した。訳もわからず腕を引かれ連れられて行く。

何があつたのか何度も聞いたが、そこにいた数十人の誰もが語ろうとしなかった。

「お父さんは？それに叔父さんは大丈夫なの？」

時雨は混乱しながらも接触の多かった二人の名を出した。

父はたぶん駄目だったのだろうが、梅雨の叔父さんがいないので聞いた。

せめてあの人だけでも無事でいてほしいと思った。

だが、時雨の腕を掴んでいる人は短く答えた。

梅雨はもう助からないとだけ言ってそれ以上話そうとしなかった。

付いて来ている者たち全員、何を見たのかこの世の終わりと言わんばかりの様子であった。

しばらく走ると、何人も入れそうな洞窟を見つけた。

少し様子を見てくるとだけ残して時雨を連れて来た人は村に向かつていった。

俺が戻らなかつたらここにいる連中を頼むとだけ告げて行つた。

その村人は朝になつても日が変わつても戻ってくる気配はなかった。こんな村に近い場所では危ないのではないかと思い、一緒に逃げて来た村人に移動しようと思をかけるが、誰一人としてまともに反応を返してくれるものはいなかった。

そこから更に二日目の夜、朝御飯の材料を求めて彷徨っている時に、

時雨は物陰から出てきた満月と出会うことになる。
ちなみに時雨はこのとき野生の熊に出会ってしまったのだと思い一
目散に逃げ出していた。

化け物はこの体になるときに手に入れた宿主の声帯を使わせてもら
うことにした。

魚の体には声帯と呼べるものがなかったためだ。この声は便利で巢
の近くにいた餌たちを捕らえるのにとっても役にたった。

この声でどこに行ったのかと叫ぶと、この体の宿主と勘違いした愚
かな餌が自ら出てくるのだ。

だがこの雌はどういう訳か宿主の声を聞いた途端に顔色が変わってし
まった。

まあ、そんなことはどうでもいい。

そちらに戦意がないのであればこちらとしてもやりやすい。

急がなければもう一人の雄の方が来てしまいかもしれない。

この雌の悲鳴は案外大きかったので洞窟まで届いてしまっているだ
ろう。

あの雄にはどう転んでも勝てる気がしない。

ここにいるのは得策ではないだろう。

巢に連れ帰ってからでも遅くはない。

化け物はそう考えると一足飛びで距離を詰め、動くことの出来ない
時雨を捕らえると山を越えていった。

化け物が山を越えるのに少し遅れて満月は時雨が攫われた現場に到
着した。

満月が着いた時には何かが這ったような足跡と時雨が取り落とした
と思われる桶が転がっていた。

足跡は山の方に続いており、どうやら山を越えられてしまったらしいことはわかった。

追うかどうか迷ったが、食らうつもりであるならば、すでに手遅れであるため洞窟に引き返すことにした。

移動は全て走っているのだが息が切れる様子もない。

満月は洞窟に戻ったら無理やりにも洞窟に来ることになった事情をそこら辺のやつらから聞き出そうと心に決めた。

森の中を複数の影が動いていた。

影の持ち主たちは一様に同じ鎧を着込み、重そうな荷物を抱えながら誰一人として言葉を交わすことなく黙々と歩いていた。

特別な動きをすることなく淡々と歩を進めていた彼らだが、周囲が暗くなってきたところに先頭を歩いていた者が左手を軽く上げた。

何かの合図なのか一同がその場に荷物を下ろすと一斉に行動を起した。

森の中に数人で入っていく者、その場で火を起し始める者、簡易だが雨露を防ぐための屋根を張り寝床を確保するものなど様々だった。

作業中でさえ誰一人として会話をするものはなく淡々と作業を進めていく、そうして森の中に分け入った者は食材を確保し、火を起したものはその食材を調理し食事を作り、屋根を張ったものは周囲にブービートラップしかけ何か近づいてきたときにわかるようにした。

左手を上げたのはどうやらここで野宿をするという合図であるらしかった。

そうして食事を済ませるとここで初めて先ほど左手を上げた者が口を開いた。

「明日には要請のあった村に到着する。要請があつてから数日経過

しているため、もしものことがあるかもしれない。各自しっかりと体を休め明日に備えろ。」

そう言うのと他の者は敬礼すると見張りを除いて床についた。翌朝、全員の旅支度が終わるとまた無言で歩きだした。しかし昨日と違い全員の様子が少し違うように感じる。

どこか表情に硬いものが混じっている。どうにも村に進むにつれ森の様子がおかしくなっているのだ。

体を休めた場所ではまだ感じた小さな動物や昆虫の気配がしないのだ。

どうやら異端者を助けるのには間に合わなかったようだ。

そのことを敏感に感じ取り全員が武器をいつでも取り出せるように警戒態勢に入っていた。

そうしてしばらく歩を進めていくと要請のあったと思われる村へ到着した。

到着したのだが、人の気配が微塵も感じられない。

鎧を着込み武装した者達は警戒しながら村人を探しに村の中へ踏み入った。

だが村中を探し回っても人っ子一人見つからなかった。

一通り村中を探し終えたと村の中央に集まり、話し合いの結果として周囲の森を探してみるようになった。

鎧を着た集団は一定の距離で全員が固まって動いていた。

しばらく探してみるとまだ新しい人の物と思われる足跡を大量に見つけた。

足跡の間隔からどうやら走っていたようだ。

ついで何かよくわからない異様な、それでいて大きな物を引きずって歩いたような跡がそれを追うように付いていた。

その時、何かが遠くから走って来るような音が聞こえてきた。

集団の緊張が高まり、誰とはなしに武器を構え迎撃態勢に入る。

少しずつ、だが確実に集団の方へ向かってくる。そしてそれは集団の目の前に飛び出してきた。

「うわあああああああ！！！！！！」

それはどうやらそこに住んでいたであろう村人だった。

何かと勘違いしているのか、凄惨な形相で絶叫すると予想していたものと違ったらしく、安堵のため息を吐くと腰を抜かしてしまった。

事情を聞いてみるとどうやらその村の住人だった者らしく、昨晚になって異端者の容態が悪化し侵食が始まってしまっていたらしい。そこまでならまだ在り来たりな話なのだが、続きが集団の誰もが驚愕することになった。

村人は村の掟で処刑の現場に立ち会うことになった者の生き残りであつた。

処刑の直前に執行人が身内を庇うために執行用の斧で村人を牽制したらしい、だがここで処刑される予定の異端者の頭が爆ぜ、中から小型の化け物が飛び出した。

そして近くにいた執行人の口内に侵入し、執行人の体が化け物に変わっていったようだ。

そこでその村人は逃げだしたようなのだが、どうやらその化け物が村をあんな風にしてしまったとみて間違いはないだろう。

「情報提供に感謝する。その化け物は我々が討伐しよう。」

集団の隊長らしき人物がそう言った。

村人は安心したように緊張していた表情を和らげると、集団を見て笑顔を作り、そしてそのまま絶命した。

情報をくれた村人は笑顔を残したまま首から下を残して、突如として現れた化け物に殺された。

音もなく木の上を渡って来ていたらしく、周囲を警戒していた者すらも気がつかせずに村人の首を木の上から刎ねた。隊長はその姿を見て思わず呟いた。

「・・・なんだ、こいつは。」

集団は職業柄がよく旅をすることになる。

そしていろいろな異端者や魔物と呼ばれる者たちを見てきた。

だが目の前のこいつは魚の体を有し、足は百足、さらには蠅螂の様

な鎌を持っている。

魔物や異端者は確かに人外ではあるが、異端者であればどこか人の名残りが残っているし、魔物であれば何かしらの動物を主軸として角や爪、大きさなどが変化した程度の違いでしかない。

だが、目の前に現れたこの化け物はいろいろな生き物を織り交ぜて作り出したような姿をしている。

こんなものは見たことがなかった。

隊長は混乱していたが、死線を潜り抜けてきた経験により集団に号令をかけていた。

「応戦用意！こいつはここで仕留めるぞ！！」

その一声で呆然としていた集団が動き出した。

隊長を中心に円を描くように包囲し、各々の武器を構えた。そして一斉に手に持った武器で化け物に攻撃を加えた。

化け物は目の前から襲ってくる攻撃を避けようとせず当たった。

剣が脚を分断し、矢が目を貫き、鈍器により頭を潰し槍が肉を貫いた。

化け物は脚を切られ平衡感覚を失い地に伏した。

集団は安堵の溜息を吐き、目の前で殺されてしまった村人に悔しそうに視線を向けた。

そして終わったのだと思い込み、油断していた集団は不意を突かれてしまった。

化け物は死んではいなかったのだ。

化け物はその場で立ち上がると近くにいた槍を持った者に鎌を叩きつけた。

体こそ引き裂かれなかったが、鎌を叩きつけられた者は衝撃により昏倒した。

次に弓を持った者に口から水を吐き出し、後ろに生えていた木にぶつけられた。

魚の尻尾の部分を鈍器を持った者に当たる。

そうして隊長を残し全員が意識を失ってしまった。

「・・・くそっ！今回の任務はとんだハズレクジ引かされたもんだな。」

苦笑いに軽口を言うと大斧を振りかぶり特攻した。

数秒後、化け物以外にその場に立っている者はいなかった。

3章：時雨拉致（後書き）

熊と遭遇した際、時雨と同じ行動を取ったら襲われるのでご注意ください。

木の上に登ったり、死んだふりをして同じ結果になるそうです。

3章：時雨拉致（2）

時雨は眼を覚ました。

寝ぼけ眼で周囲を見渡してみると、どうやら自分の部屋にいらしいことがわかった。

何かよくない夢でも見ていたかの様に現実感がない。

顔を洗って目を覚まそうと自分の部屋から居間に出た。

居間は大量の血と思われるもので真っ赤に染まっていた。

「ひっ！」

瞬間的に目は覚めたが何が起こったのかわからず放心してしまった。少し経ち時雨はすべてを思い出した。そして唐突に天井から何かを引っ掻くような音が聞こえ、恐怖から思わず見上げてしまった。

そこには時雨をここに連れて来た張本人である異型の化け物が張り付いていた。

化け物は時雨をじっと見つめたまま動こうとしない。

「あ、ああ……。」

時雨は食われるという恐怖により動けなくなっていた。

だがどういつ訳か化け物は時雨には何もせずそのまま家から出て行ってしまった。

時雨はまた何が起きたのかわからずに放心してしまった。

逃げようかと思ったが外から聞こえる音で家の周囲にすることがわかった。

しばらくするとまた化け物が家の中に入ってきた。

そして時雨の前に野兎と少しの野菜を置いた。

時雨は思わず化け物に聞いてしまった。

「……あの、えっと、これはくれるの……かな？」

もちろん化け物は答えない。

血まみれの部屋を見て食欲など全くないのだが、いつここから解放されるのかわからないうえ、次はいつ食事を取れるのかわからない

ので食べておくことにした。

化け物の真意はわからないがどうやら時雨を食べるつもりはないらしい。

じつと見つめられていて落ち着かないが、ここはおとなしくしていたほうがいいと判断し、生はさすがに遠慮していいので調理することにした。

「満月……。」

切なげに思い人の名前を呟き、調理場は血まみれじゃないといいなあ。

と暗くなり始めた外を見つめ、そんなことを考えながら食事の準備を始めた。

「はあはあ……。ぜえぜえ……。」

満月は走っていた。

時雨がいなくなつてすぐに洞窟に戻り、怒号をあげつつ半死人状態の村人から事情を聞き出すのに結構な時間をくってしまった。

「くそ！面倒なことに、巻き込まれちゃったもんだ！」

村人の話によると洞窟から村まで人の脚では半日ほどかかってしまづらい。

焦燥と苛立ちが腹の底に溜まり、走っているため結構苦しいのだが声に出してしまう。

「待つてる時雨、必ず助けてやるからな！」

そう言つて走っていると獣道の先の方に何かが転がっている。

近づくにつれその正体が鎧を着けた人間だということがわかった。休憩も兼ねてその転がっている連中に近寄つて見た。

「ぜえぜえ……。おい、あんたら、大丈夫か？」

満月は息切れを整えながら転がっている連中に声をかけた。

一応全員の息があることはわかつていたので意識があるのか確認し

た。

どうやら何かの騎士隊らしい。

「・・・ぐっ！死んでないという意味では全員大丈夫だ。」

一番大丈夫でなさそうなやつが答えた。

そいつは両腕と片足が変な方向に曲がってしまっている。そして軽傷のものたちがそれを看病していた。

「そうか。なら俺が走って来た方角に洞窟がある。そこに30人程度の村人がいるから保護してやってくれ。」

満月は手短にそう伝えると走って行こうとした。急がなければ時雨が危ない。

「待て！そちらにはとんでもない化け物がいるぞ！」

細かい事情を説明する時間も惜しいが、重症のそいつが這ってでも付いてきそうなので、立ち止まった。

「女が一人化け物に攫われたので連れ戻しに行くんだ。急いでいるんでもう行くぞ。」

そう告げるとそいつは余計に声を荒げ、折れた腕で満月を引き留めようとしてきた。

「やめなさい！その女性ならきつともう駄目だ！お前が行っても無駄死にするだけだ！武装し、訓練もつんでいた我らがこの有様なのだ！君のような丸腰の者がいつても餌になるだけだぞ！」

満月は後ろを振り返ると答えてやった。

「女は無事だ。今日は満月だからな。それと俺なら平気だ。あんたらよりは無事に帰ってこれるさ。」

そう告げたが、そいつは決して引こうとしない。

「何を根拠にそんなことを言っているんだ！それに君は知らないかもしれないが、君が行こうとしている場所にいるのは異端者でも魔物でもない化け物なんだぞ！」

満月は溜息を吐くと、めんどくさそうに頭をかいた。

「あいつらは満月の夜に繁殖行動を起こすんだ。だからあの女はただ無事だ。それとあんたらよりはアレに関して詳しいし、生まれて

せいぜい1週間のあれなら簡単に殺れるんだよ。」

そう言つてやると、そこにいた連中が全員動きを止め、先ほどから満月に絡んでくる男が聞いてきた。

「あれだと、お前はあの化け物のことを知っているのか？それに殺れると言つたな。瞬時に体の傷が治るような化け物だぞ？」

心底わからないという様に男は聞いてきた。

日が暮れ、夜が更けるまで時間がない。

事情を説明している時間など本当はないのだが、説明しなければ満月を行かせてはくれないだろう。

「知っているさ。俺はもつと成長したアレに大切な人を目の前で奪われた。その時に俺も殺されかけてる。だが俺だけはギリギリである人に助けられた。そしてその時にあれを殺す方法も教わった。」

9割り以上省いたが、男たちの動きが止まった。

啞然としている男の折れた腕を払い、もう追つてこないことを確認し歩を進めた。

「ま、待て！だがそうだとしても君があいつに敵うわけがない！我々は実際にやつと戦ったからわかる！あれは人間に敵う相手じゃない！まして君のいう殺す方法があつても訓練も積んでいない君じゃ近づく前に殺されるぞ！！」

満月は走りだしてから少し立ち止まり、男たちに笑顔向けあることを告げるとすぐに走り去ってしまった。残された男たちは満月の言葉を聞き呆然となった。

時雨は空を眺めていた。

異型に渡された食材を調理し食事を済ませ、今は片付けも終わり休

んでいるところだった。

異型はどうやら血で染まったあの部屋にずっと張り込んでいらしく出ていくことができないのだ。

一度だけ出て行こうとしてみたのだが、進行方向に鎌を突き刺され髪の毛が数本宙に舞ったので再度挑戦するのはやめておくことにした。

これからどうなるんだろうか？連れてこられたのが食べる目的でないとするなら……。

考えるのが怖くなったので首を振り、再度空を見上げた。

「今日は満月なのかぁ。」

と呟いた。空を見ながら考えるのは常について先日知り合ったばかりの男性だった。

あの人は無事なのだろうか？すでに異型に食べられてしまったのだろうか？それとも、あのままお別れもしないままどこかに旅立ってしまったのだろうか？それとも私を助けるために向かってくれていたのだろうか？先日知り合ったばかりでそんな危険を冒してくれるわけがないなと思いつつ。

この絶望的な状況の中、その思いだけが時雨を自棄になるのを防いでいてくれた。

3章：時雨拉致（3）

夜10時になった頃、異型の化け物はゆっくりと行動を開始した。化け物は天井から血まみれの床に音も立てずに降り立つと時雨のいる部屋に向かって這いずって行った。

時雨はすぐに化け物の存在に気が付き、昼と様子が違うことにまで気がついたようだ。

徐々に部屋の隅に追い詰められていく。

化け物は時雨の姿を認めると、まるで獲物をいたぶるかのようにゆっくりと逃げる時雨に近づいて行った。

化け物は一定の距離まで近づくと立ち止まり、その口を大きく広げた。

時雨は驚愕により動けなくなってしまうている。

化け物の口内上部に、叔父に該当する男の顔が張り付いていた。

化け物は時雨の驚愕になど興味を持たなかった。

時雨はその直後に嫌悪の悲鳴をあげることになった。

魚の口内から無数の触手が飛び出してきた。

その触手は時雨の逃げ道を防ぐように取り囲み、その中の数本が体に巻きついてきた。

触手はぬるぬるとしており、本体が魚だからかとても生臭い。

そして触手は服の中に潜り込んでくると、今度は下腹部に向かって下がってきた。

へそまで触手が進んで来たところで、生理的嫌悪感により悲鳴を上げた。

「いやああああああ！！！満月助けてえええ！！！！！！」

時雨は嫌悪と絶望に涙を流していた。

咄嗟に思い人の名を叫んでしまったが、彼がわざわざ危険を冒して時雨を助けに来る理由などないのだ。

時雨の絶望を他所に異型は時雨の体を蹂躪しようと最後の一線を越

えようと、目的の場所に触手を伸ばした。

その時、化け物の横を風が通り抜けた。

風は化け物の触手を切り裂き、時雨に巻きついていった触手を払いのけた。

そしてそこまでして初めてその姿を現した。

森の中を村人に聴いた方角に真っ直ぐ進んで、満月はなんとか柏村の入口に辿りついた。

ここに連れてこられているだろう時雨の場所を突きとめようと意識を集中した。

だが、化け物が大量の村人を食い荒したらしくここからは血の臭いがきつ過ぎて探ることができない。

仕方なく周囲に気を配りつつ村の中へ踏み入った。

しらみつぶしに探すには時間が足りないので、何かないかと全神経を集中させて周囲に気を向けた。

20分ほどが過ぎ、手遅れだったのかと絶望に押し潰されそうになったときにそれは聞こえた。

それは時雨の助けを求める悲鳴だった。

その声を聞いた時、満月の中で何かが切れた。

「頼むぞ・・・！間に合ってくれよ・・・！」

切羽詰まったように言うと、満月は悲鳴の聞こえた方角に向って走り出した。

突風が部屋の中に吹いたかと思うと触手に支えられていた時雨の体は宙に投げ出された。

唐突に支えを失った時雨は床に尻もちをついた。

頭に疑問符を浮かべながらう？う？と唸っている。そして少したち涙目になったところで風を巻き起こしたと思われる張本人が異型

と時雨の前に姿を現した。

その姿を見て涙は引つ込んだのだが、時雨は浮かべていた疑問符の量を増やすことになった。

時雨を助け出したのは女性だった。

しかもどういう理由か浮いていた。

腰まで届くのではというほど長い水色がかった髪の毛、澄んだ川面を思わせるほど透き通った水色の瞳、服は白い着物を着ていた。同性の時雨から見てもとても綺麗だった。

時雨にはその人がなぜ自分を助けたのかがわからず、動揺を隠せな
いままとりあえず助けてもらったお礼を言っておこうと口を開いた。
「えと、あの、どなたか存じませんが、助けていただいてありがと
うございまふいら？」

最後が疑問形になってしまった。

なぜかその女性がお礼を言おうとしていた時雨の頬を両手で引つ張
ったのだ。

痛い。

とても痛い。

結構本気で引つ張っているらしい、女性の手が震えている。

時雨はまた訳がわからず涙目になった。

そしてその女性は多少満足したのか手を離して時雨に話しかけた。

「元氣そうで何よりじゃのう。小娘。いっそ食われてしまっていれ
ばいいものをな。」

・・・笑顔でそんなことを言われた。

えらく機嫌が悪いようで、額には青筋が浮いている。

異型とは別の理由で怖かった。

異型には生理的な恐怖も入っていたのだが、この女性は単純に怖い。
時雨から一瞬たりとも視線を外さない。

顔は笑っているが目が笑っていないのも一つの原因のようだ。

すでに浮いているとか異形とかそれどころではなかった。

本能的にこの人をこれ以上怒らせたらまずいというのがわかった。

時雨が恐怖に怯えていると、異型は切られた触手が癒えたらしく落ちていた触手は残っていない、どうやら口の中に引っ込めたようだ。攻撃してきた時雨の目の前にいる女性を敵と認識したらしく、女性を威嚇して鎌を振り下ろした。

「危ない！」

時雨は咄嗟にその女性に対して叫んでいた。

目の前の女性は避けようとせず振り返って鎌を見ている。

鎌が女性を切り裂いた。

女性の体が二つに分かれる。

分かれたと思った。

鎌が通り過ぎたはずの女性の体は、服も合わせて異型の鎌が振り下ろされる前のままだ。

時雨は急な展開に付いていけずに呆然とするしかない。

異型も訳がわからないのか後退して奇怪な音を出している。

女性は異形を指さすと声を荒げずに呟いた。

「我に触るな。この下郎。我に触れていいのはこの世にただ一人だけじゃ。」

そう呟くと同時に異型は壁を突き抜けて吹っ飛んだ。

時雨は啞然とするしかない。

異型に何が起きたのか、どうやら異型を飛ばしたと思われる圧倒的な強さのこの女性は誰なのか、そしてなぜ時雨を助けてくれたのかかわからないのだ。

「・・・俺の、出る幕は、ないか。それと、水守、みもりどう考えても、やり過ぎだ。・・・時雨は大丈夫そうで何よりだ。」

そう言って満月は窓から顔を覗かせた。

どうやら水守と呼ばれたこの女性は満月の知り合いのようだ。息切れしているらしく言葉が途切れ途切れになっていた。

時雨は満月がきてくれてうれしくなったのだが、時雨より先にその女性に話しかけたことが若干ショックだった。

「小娘を助けてやったのじゃ。少しは感謝したらどうじゃ？」

満月に対して怒りを隠そうともせず、やたら高圧的にそう告げた。満月がやれやれという仕草をしたあと、その女性に対して助かったよと短く言った。

それを聞いて少し怒りが収まったらしい女性は、それでもムスツとしたまま時雨から少し離れた。

よっ！と勢いを付けると時雨は窓から部屋の中に入ってきた。

時雨の傍に来ると優しい笑みを浮かべて頭を撫でた。

「怖かったろ？もう大丈夫だぞ。」

時雨は知っている顔を見てようやく恐怖から解放されたのか、ぼろぼろと泣きだしてしまった。

助け出した二人は「この女泣かせは、本当にどうしようもないのう。」「いや、どう考えても俺のせいじゃないだろ？」などと口論している。

もう何が何だかわからないが貞操を異型に奪われなかったことと、満月が助けに来てくれた嬉しさでいっぱいだった。

時雨は女性が助け出してくれる直前に、全てを諦めて体を投げ出していた。

それが二転三転して無事なまま好きな異性に頭を撫でられている。嬉しくない訳がない。

だが少しすると、あることを思い出した。

「口の中に、伯父さんの、顔があったの。どうして・・・？」

時雨はまだ泣いていた。

満月は時雨を見ると悲しそうに告げた。

「たぶん、食われちまったんだろうな・・・。」

満月は立ち上がると異型が吹っ飛んで行った方角を見る。

「さて、後始末だ。」

と、面倒そうに呟いた。

時雨は泣きながらも満月のほうを見る。

満月は泣いている時雨に笑顔を向けた。

そして化け物の飛ばされた方を見て立ち上がると、ちょっと待って

ると言つて穴の開いた所から飛び出していった。

後には時雨と水守が残された。

時雨は泣きながらもさっきお礼ちゃんと言えてなかったなと嗚咽混じりにだが水守に告げようとした。

「我に礼など言わなくてよいぞ。」

水守は時雨を見ようとせすにそう言った。

「我は満月に頼まれなければ主のような小娘を助けたりなどしておらんでな。礼を言うなら満月にでも言つてやるがよい。やつは主を助けるために洞窟からずっと走ってきたのじゃからな。」

素気なくそう言つと水守は時雨を見た。

正面から見るとやはりとても綺麗な女性だった。

時雨は一瞬見惚れてしまったが、すぐに正氣に戻ると、水守を正面から見据えた。

「どういう理由かはともかく、えつと、水守さんは私を助けてくれましたから。だから、

お礼は勝手に言わせてもらいます。助けてくれてありがとうございました。」

そう言つと座つたまま深く頭を下げた。

水守は居心地が悪そうに顔をしかめると勝手にするがよいと告げて顔を背けた。

時雨は頭を下げていて気がつかなかったが顔を背ける直前に見えた女性の顔は笑っていたようだった。

異形の化け物は森を走っていた。

先ほど見たこともない自分とは違う性質の異形の女に軽くあしらわれたのだ。

あの時、異形の女に鎌を振つたとき確かに女に当たつたように見えた。

だが実際は空を切つたように当たつた感触がしなかったのだ。

化け物は初めて得体の知れないものに恐怖した。

その時、化け物は背後に何かを感じ咄嗟に横に跳んだ。

直後、前に生えていた植物に何かが突き刺さった。

そして轟音と共にその植物は、その何かが突き刺さった部分から、半分に叩き折られた。

「ちっ！今のに当たってくれたらこれ以上無駄に動かずに済んだつてのに。」

植物を叩き折った物の正体は先ほど女に吹き飛ばされる前に窓から顔を見せた者だった。

「さて、あんたには悪いがここで決めさせてもらうぞ。面倒なのはごめんだからな。」

そう言うと同時に男に異変が起こった。

髪の毛と瞳の色が黒から銀に、狼を思わせる鋭い犬歯とその爪、それを見ると化け物は即座に逃げ出した。

「おいおい。ここで逃げるのかよ。・・・まあ少しは知能があったつてことだな。」

そんな台詞が化け物の逃げようとした先から聞こえた。

満月は化け物の進行方向に回り込んでいた。

顔には狩る者の獰猛な笑みが浮かんでいる。

「この姿になると自分を抑えるのに苦労するな。あんま長時間なつてるとお前の様に元に戻れなくなるしな。悪いが」

そう言つて満月はそこで一旦間を置き、尚も逃げようとする化け物に告げた。

「もう終わらせてもらつたぞ。」

それがいつ行われたのかわからなかった。

満月のその言葉が聞こえたか定かではないが、化け物はその場に崩れ落ち、そのまま起き上がることはなかった。

「よし、後始末終了。二人のところまで戻るか。」

そう言つて頭を掻く満月の姿はもう狼を思わせる銀髪のものではなく、目つきの悪いだけの黒髪の男に戻っていた。

置いて行かれた化け物の遺体には、口の中にあつたと思われる時雨
の叔父の顔が潰されてなくなっていた

3章：時雨拉致（3）（後書き）

見てくれている人がいるか知らないが、コピペ作業はまだ始まったばかりだよっ・・・！

読み直すとても恥ずかしい作品でしたまる

四章：一時の安寧

「そういえば満月はいつ水守さんと呼んだの？」

柏村で化け物を倒し、村の生き残りのいる洞窟に向かって歩いていく最中、さも今気がつきましたというように時雨が聞いてきた。

しかし村で満月が合流し時雨が落ち着きを取り戻し洞窟へ向かうことになった時から、ずっと上空で満月に話しかけられると「うえ！？え？うん。そうだね。」という反応しか返さず、水守の方をやらたら盗み見ては溜息を吐いて、拳を握るなどの動きをしていた。

さらに質問するまでの移動中は独り言をぶつぶつ呟いては満月と水守を見比べるなどしていたのだ。満月は苦笑いしかできず、水守に至っては呆れて溜息を吐いている。

「え？え？何か変なこと聞いたかな？」

何か拙いことを聞いたのだろうかとき雨は少し縮こまってしまった。「なに、村から今までそんなことを考えていたのかと思っただけさ。」

「話しかけても上の空だったしな。と満月が言うと、時雨は顔を真っ赤にした。」

「いや、それは、その、水守さんが何か、その満月と知り合いみたいだったから、えと、少し気になったただだよ。」

時雨はしどろもどろになりながら言い訳をする。

満月はまた苦笑いすると時雨の質問に答えてやった。

「まあいいさ。それと水守ならずと俺の傍にいたぞ。まあ俺にも時雨にも見えない状態だったけどな。」

そついうと満月は近くで浮いている水守の方を見る。

水守は仕方ないのうと溜息を吐くと、その姿が虚空に消えた。少しすると虚空からこれで満足かの？と聞こえ、水守がまた空中に姿を見せた。

時雨は訳もわからず啞然とするしかない。

「本来ならば我に体などという物は存在せぬ。この体は空気中の水分で出来ておるでの。消えたように見えるのは体を元の水に戻したからじゃ。主に細かい説明などしてもわからぬだろうからせぬぞ？徒労に終わるのはつまらぬでのう。」

そう言うのと面倒そうに頭を掻いた。

そうして啞然としている時雨を見ると、何か思い出したらしく、笑みを浮かべると時雨に近寄り耳元で一言だけ何かを囁いた。すると何を言われたのか、茫然としていた時雨がこれまでに無いほど顔を真っ赤にして慌てふためいた。相当恥ずかしいのか、手で顔を覆いながらあわあわ言っている。

「どうした？昨日の夜がどうか聞こえたが何かあったのか？」

満月がそう聞くと、時雨はかわいそうなほどびくつと反応すると目を逸らしながらナンデモアリマセンと抑揚なく答え、どこか厭らしい笑みを湛えながら浮いている水守に対して涙目になりながらこそそと何かを言っていた。そして水守は涙目の時雨を見ると頭に手を置いた。

「時雨はかわいらしいのう。どこかの誰かさんとは大違いじゃ。安心せい満月には教えてやらぬよ。教えたなら教えたでどういう行動を取るのかも想像がつくでのう。」

そう言いながら時雨の頭を撫でている。どうやら時雨は水守に気に入られたらしい。昨晚は助けに行ってくれと頼んだときとはえらい違いだ。

あんな小娘などいつそ食われてしまえばいいなどと言っていたとはとても思えない。

「可愛げがなくて悪かったな。」

満月は仏頂面でそう言うのと溜息を吐いた。まあ俺以外に水守が心を許せる相手ができたならいいだろう。そう思い二人の方を振り返る。水守は楽しそうに、そして時雨はどこか嬉しそうに笑っている。それを見ると満月は表情を崩した。

「時雨は許してやろうかのう。だがその女たらしは決して許して

やらぬからな。」

そう言つて満月を軽く睨む。時雨は完全にそっぽを向いている。耳まで真っ赤になっているので今は触らないでおいてやろう。

「俺が何かしたか？」

特にこれといったことはしていないような気がするが……。

「ほう？心あたりはないと申すか？」

そう言つと水守の額に青筋が浮いた。これは拙い。

「あれか？初対面で時雨を口説いたことか？」

時雨が関わっているのはそれくらいのはずだ。

それを言つと時雨は両手で顔を覆つた。見えている耳が真っ赤に染まっている。そして顔を覆っているために前が見えず、何度も蹴躓いているのだが、その度に水守がさり気なく支えている。

「それもあるのだが、今回は違うのう。」

短くそう言つと満月に向かつて化け物を吹き飛ばしたときの様に手を向ける。いや、あれは本当に洒落にならない。

「待て！とりあえず落ち着け、何をしたのか思い出すから少し待つてくれ！」

こちらにも命に関わるものなど食らいたくない。満月は歩を進めながら思案した。

「時雨には口説く以外のことはしてないから……。あれか？前の村で口説いた子のことか？あれはもう終わったことだろ？いや違うな。となるともう一つ前の村のか？でもあれも終わったことだし……。」

はつと気がつくと時雨は満月を見ながら絶句し、水守の額の青筋はすごいことになっていた。

……ああ、これは死んだかもしれんな。と考え空を見上げた。見上げた空には夜が明け綺麗な青空が広がっていた。

四章：一時の安寧（2）

太陽が真上に上った頃、満月達は洞窟に辿り着いた。

「おお！無事に戻ってきたか！女の子も助けられたようだな！」

そう言っただけで迎えてくれたのは村へ行く途中に出会った一番重症な騎士の男だった。

「だが、相当辛い戦いだっただろう。ぼろぼろじゃないか。おい！誰かこの英雄を手当てしてやれ！！」

満月は服がところどころ破け、体中が擦り傷だらけになっており、さらに片目は酷く腫れ上がり、青あざまで付いている。酷い有様だった。

「ええ……。予想外の攻撃を受けまして……」

そう言っただけで時雨の方を盗み見る。怒ったような表情をして満月から完全に顔を背けている。

体中の擦り傷は水守に吹っ飛ばされ時にできたもので、目元の青あざは時雨に叩かれたときにできたものである。平手ではなく握り拳が飛んできたのでこんなあざになった。水守は宙に浮きながら心底楽しそうに笑っている。

「身から出た錆だのう」

などと原因を作っておきながらそんなことを言ってくれた。『この女、いつか泣かす』と満月は心に決めた。

「たぶん大丈夫でしょう。軽い打撲と浅いすり傷ばかりのようですから」

治療をしてくれた騎士がそう言っ て笑顔を見せてきた。

「そうですか、ありがとうございます」

笑顔を見せてきたことに少し驚いたが、とりあえずお礼は言っ ておいた。

自分でも大した怪我じゃないのはわかってはいたが、人からの善意を蔑ろにする必要もないだろう。

「無事で何よりだ。ところで聞きたいことが何個あるんだが答えもらえるか？」

隊長と思われる者がそう聞いてきた。やはりこっちが本命か。内心では疑っていた自分に苦笑いした。何かされそうになっても軽く逃げられるだろうと少し考えると了承した。

「はい。俺に答えられることでしたらお聞きしますよ」

満月は作り笑顔で愛想よく答えた。

「似合っ てないのう」

「綺麗な作り笑顔だね」

などと仲良く外野が何か言っている。……覚えとけよ。

「では聞かせてもらおう。あの化け物はどうしたのだ？」

どうやら言葉を選んでいられるらしい。少し質問する前に間があった。

「ここに俺と時雨がいることが答えにはなりませんか？」

と後ろで水守と話していた時雨を軽く振りかえる。うええ！？と話を聞いていなかった時雨は突然に視線が集められ何とも言えない奇声を上げる。

時雨がかわいらしいから皆が気になったんじゃないやろ。などと水守が時雨に呟いている。時雨の顔が真赤に染まる。

いや、時雨、違うからな。つか水守、お前は絶対に話を聞いたうえで言ってるだろ？

「助け出したのは間違いないようだが……。しかし、あの化け物は本当に倒せたのか？連れて逃げて来ただけではないのか？」

どうやらそこがどうしても信じられないらしい。

満月は溜息を吐くと腰に付いていた小さな袋を隊長に投げてやった。隊長は眉根を寄せる。それが何かわからないのだろう。

「これは何かね？小型の異形にしか見えないが……」

予想通りの返答がきた。

そうだろうなと思いながら満月は隊長に説明してやった。

「そいつがああな化け物の本体に辺ります。その小さいのが人の脳に取りついて変異したのがあな化け物」

ですよ。だからどれだけ外の外殻を傷つけたところで痛くも痒くもないんです。つまりそいつさえ潰せばあな化け物も止まるんです」

そう言つてやると、こいつがあのかけ物の本体だと……？と騎士隊がざわついた。そりやそうだろう。あのかけ物の本体がこんな小さな20cmもないやつだったなんて、簡単に信じられるはずがない。そう思つていた満月だったが、騎士隊の隊長だけは違つ反応を返した。

「そうか、ならば教えてくれ。こいつが取り付いている場所を見極める方法はないのか？そして、それがわかれば我々にもあのかけ物を倒すことができるだろうか？」

満月はその言葉を聞いて驚きを隠せなかった。これだけやられ、なおこの男はあのかけ物と戦うと言うのだ。人に対して初めて尊敬の念を持つたかもしれない。

「そこまで言うのなら教えましょう。ただし、あなたの名前を伺つてもよろしいか？」

水守が驚きの声を上げ、時雨は敬語も似合つてないねえなどと言っている。……時雨とは後で話合ふ必要があるようだ。

「私は梅の都にある異端対策に設立された騎士隊の一人だ。2番隊隊長の大地だいちと言う。頼む。一人でも多くの民を救うのに必要な知識なのだ」

そう言つて頭を下げる。

部下達も迷いなくそれに続いた。

「見分けるのは簡単です。人として残っている部分を探すだけですからね。ただ、その場所がどこかは一体一体で違います。今回のアレは口の中にありました。他にも腹の下や、内臓に張り付いていた

りなどがあります。」

満月は姿勢を正し、彼等の誠意に応えるべく説明していく。

「一番手っ取り早いのは体を小間切れにすることなんです、普通の人にそんな芸当は出来ないでしょう。そのためあなた方がやるのに適している方法を上げるならば、アレの口の中に小型の炸裂弾を投げ込んで内側から爆破することでしょうかね。火薬は高級品ですがアレをやるならそれくらいは必要経費でしょう」

満月は更にと続ける。

「バラバラになっても中には死なないやつもいます。そういう場合は落ち着いて残っている体の部品を確認してください。もしくは本体が近くにいて操っている可能性もあります。複合されている物の中に植物を模した物が入った系統だと、球根に当たる部分が本体になり、つまり土の中に隠れている可能性が高くなります」

最後に植物が入っているなら火を放った方が早いですがね、と付け足す。

「情報提供に感謝する。それともう一つ聞きたいことがあるのだが……」

隊長が謝辞を述べもう一つ質問をしようとし、迷いがあるのかそこで一拍置いた。満月は次の質問がなんとなくわかっていたので無言で隊長にその先を促す。

「うむ。その、だな。君がその娘を救いに行く途中で我等に告げたことなのだが……」

核となる部分を伏せ、心配そうに後方で消沈している生き残りの村人の方を盗み見た。

村人にこれ以上心労をかけたくはないのだろう。つくづくお人好しなようだ。満月は苦笑い混じりに答える。

「本当ですよ。嘘は何一つ言っていません。アレから時雨を助け出したのもそれのおかげですからね」

隊長はしばらく真面目な顔で満月の目を見ると溜息を吐いた。

「どうやら本当のようだ。それにそれくらいでなければあの化け物を倒すなど不可能だろう」

そついうと隊長はさらに深い溜め息を吐いた。

「そうか、ならば仕方がないな。出来ることなら我等が主君にお目通りして今回の褒章を与えてもらいたいところだったが……。主もそうであるならば都に入ることも出来ぬからな」

どうやら満月に褒美を与えたかったらしい。つくづくこの人は変わっているなと満月は感じた。

「いえ、褒章など結構ですよ。私は別にそついう物が欲しくて助けに行った訳ではないですから」

正直な所、珍しい人物と出会うことが出来て満月は満足しているのだが、隊長はそれでは納得できないようだった。

「いや、たとえどんな理由であろうと民間人に助けられたのだ。しかもことがことなだけに、それなりの褒美が出ていても不思議ではないのだ。……ふむ、そうだな。おい！我等の持って来た路銀を持って来い！」

隊長は近くにいた部下にそう言うと、部下は敬礼を返しすぐに路銀の入っているであろう袋を持ってきた。我等にはこれしかできないがと言うとその袋をこちらに放ってきた。

「ちょっと待ってくれ！いや、待ってください！いくらなんでもこんな大金受け取れませんよ！」

ざっと5万ゼニーほどの大金が袋の中には納まっていた。普通の家庭の年間の収入が1万ゼニー程度だ。それからしたら5万ゼニーは十分過ぎるほどの大金になる。

「気にするな。それは今回の任務の報酬と経費だ。我等は任務に失敗したのだ。それは化け物を倒した君が受け取ってくれ」

そう言うと隊長は豪快に笑った。部下達も異存はないらしく「もらってやってくれ」「ただ働きもたまにはいいもんだ」などと言っている。

「自分で言うのもなんだが、私は頑固なのでな。返品は一切受け取らんぞ！」

満月は口を半開きにして呆然とするしかない。水守と時雨は「貰えるならばおとなしく貰えばいいものを。」「うわぁこんなお金初めてみたよ。」などと後ろで相変わらず勝手なことを言っているようだ。

しばらく呆然としていた満月だが、騎士達の顔をまじまじと見て本気なのだとわかれると表情を崩して吹き出した。

「ぷ。あははは！なんだそりゃ！勝手に渡しておいて返品は受け取らないとか、自分勝手過ぎだろ！」

水守が少し驚いた表情をしたが、すぐに満月を見ながら微笑を湛えると「今日はいいい日になりそうなのう。」と隣にいる時雨にも聞こえぬほど小さな声で呟いた。

森の一角で満月に殺された化け物を見下ろす人影があった。

人影は何をするでもなく佇んでいたのかと思うと、いつの間に取り出したのか手に持っていた肉片を化け物の死体に放り投げた。

肉片が化け物の死体の上に落下したところには人影は消えていた。

森の中は不自然なほど不気味に静まり返っていた。そして肉片を放り投げられたはずの化け物の死体も人影と同じようにその場から消失していた。

化け物の死体があった場所には化け物より数倍大きな何かが寝転がっていたような跡が残っているだけだった。

そこから少し離れた丘の上にそれはいた。

10mを超えるのではという巨体を持ち、その巨体を構成している体の中には満月に殺されたはずの化け物の死体が含まれている。

化け物の死体部分がその脚を構成しており、死体を引き延ばしたように死体の後方にも百足の脚が続いている。そしてそこから空に向かって蠅螂の体が飛び出している。あたかも蠅螂が魚の体を食べ破って出てきたような形となっている。

ここまでは化け物の体を構成していた物なのだが、そこへ更に異質な物が混合されていた。それは蠚螂の首から上に付いていた。そこには猫科の動物だろうと思われる物の顔が乗っていた。口には鋭利な牙が生えており、目は獲物を求めて彷徨っている。そしてそれは何かを見つけたのか、そちらの方角を見ると喜びを抑えきれないように身震いすると、化け物はそちらに向かって大きく吠えた。

四章：一時の安寧（2）（後書き）

久しぶりにこちらを更新してみた。

コレの更新は無心であるのが一番だと悟った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1198i/>

人狼奇譚

2010年10月11日00時31分発行